彩王主

紅緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彩王主

【Ｎコード】
Ｎ５０７１Ｇ

【作者名】
紅緋

【あらすじ】
世界を統べる三人の王は同じ人間を愛してしまった。この男女比は完全なる逆ハーレム。３人の男たち（非人間）に愛される主人公は美麗な青年！？（ＢＬにあらず）色々なイロの『力』の話。

彩王主００　語り継がれるもの

「ねぇクラン、クランの王さまのお話がききたい！」
「王の話ですか？分かりました。でもこれを聞いたら大人しく寝るんですよ」
「うん！ぼく、ちゃんとねるよ」
「いい子ですね。では始めましょうか」

――この世界には色（しょく）という精霊がいます。火に、水に、大地に、自然の中のありとあらゆる場所に存在し、この世界を保っています。色は己に定められた属性でもってこの世界の秩序を守っているのです。翡翠は風を、紫は天候を司るように。
その我ら色を束ね、君臨するのが彩王（さいおう）と呼ばれる3人の王なのです。遥か古から存在し、万物に通じる彩王。

「私もまだ直接お会いした事はありません。ですが、感じることはできます。王の存在はあまりにも大きい」
「そばにいないのにわかるの？」
「ええ。王は世界そのものですから。さて、そろそろお休みにしましょう。明日は朔の、月の出ない夜になるので決して家の外には出ないようにしてくださいね。何かあっても私は助けることができませんから」
「うん。大丈夫だよ！父さんも母さんもいっしょにおうちの中にいる」
「愛しています、イェンフェン。我が主。良い夢を」

彩王主０１　旅人の正体

『朔夜唄』

朔の月の夜は
息をひそめて

星降る夜に
おやすみ　愛し子

暁の　鐘が鳴るまで
ねむれ　愛し子

朔の月の夜は
見つからぬように
おやすみ　愛し子

＊＊＊

赤く染まった空。星は静寂を失い、輝きを忘れた。熱を孕んだ風が火の粉を纏い、家々を飲み込んでいく。煙と　煤と　錆びた鉄の臭い。一つの村が消えた　朔の夜。

「……っ」

「――ヤト！アヤト！」
肩を強く揺す振られ意識が現実に戻ってくる。目の前には心配そうな顔をした三人の連れ。
「大丈夫か？酷くうなされていたが」
どうぞと言われ手渡された水に口をつける。冷えた水が喉を通り、高ぶった神経を落ち着かせてくれる。
「……久しぶりにあの夢をみた」
先ほどまでの悪夢を消し去るようにもう一度強く目を瞑る。
すべてを飲み込んだ　紅い炎華
「そろそろ日が暮れる。食欲があるようなら何か食べとくか？」
「ああ、大丈夫だ。今夜は忙しくなるだろうからな、今のうちに腹ごしらえしておこう」

「さすがに混んでいるな」
「こんなに客がいたのか、この宿」
「……失礼ですよ」
宿の一階の食堂は夕暮れ時とあって、客で賑わっていた。
空いている席に腰を下ろし、寄ってきた店員に四人分の酒と食事を注文する。
「それで、何か聞けたか？キイロ」
食事を待つ間、情報収集のため昼間宿を追い出したキイロの報告を聞く。
「ええ。この町の皆さんもとても親切で。花や果物まで貰ってしまいました」
後で一緒に食べましょうねと穏やかな顔でそう言い放ったキイロはこの中で一番愛想がいい。亜麻色の柔らかな髪と琥珀の瞳をもつ彼に甘く微笑まれたら、何人たりとも口を割らずにはいられまい。過去何度その笑顔に騙されたことか。

「この前の朔月は隣村が被害にあったそうです。今までの行動範囲と頻度からみて今夜はこの町で間違いないでしょう」
「この町の守りはどうなっている？」
私の右隣に座っているシアンがキイロに問う。
「緊急時の避難場所は中央集会所になっているそうです。あとは自警団の方々が見張りと巡回にあたっていましたが、あまり期待できませんね」
「傭兵も集まっているみたいだけどな」
呟いたのはベニ。
周りに視線をやると客の大部分は鍛え上げられた体を持つ男たちで、独特の雰囲気はすぐにそれとわかる。くつろいではいるが、隙がない。
「今日の獲物は大物なのか？」
「噂では光陰のバーミリオンらしいですよ」
「上物じゃねえか！これで少しは生活が楽になるな」
ベニが嬉々として叫べば、
「おい、誰のせいで切り詰める羽目になっていると思っているんだ。必要もないのにお前が馬鹿みたいに食うからだろう？少しは自重しろ」
シアンが的確な主張をする。
「てめぇシアンもう一度言ってみろ！誰が馬鹿だって！？」
「お前だ。ベニ」
恒例のベニとシアンによる罵り合いが始まった。両者とも種類は違うものの、美丈夫と呼ばれる部類に入る。艶やかな漆黒の髪と、紅く輝く瞳をもつベニ。対するシアンの首筋には淡い銀髪が揺れる。青玉の瞳は今、ベニを見据え冷たく輝いている。非常に整った顔立ちの二人が眉を寄せれば、その迫力は常人の倍。恐ろしい事この上ない。だが、決して二人が本気になることはないと分かっているので、横で傍観を決め込むことにする。下手に関わらないほうが身のためだ。この二人をうまく抑えられるのはキイロしかいない。正面

に座るキイロに、どうにかしろと視線で合図を送ってみる。
聡いキイロはこちらの意を汲み取り、ひとつ頷くとタイミングよくここへ運ばれてくる料理を利用した。
「ベニ、シアン、料理がきましたよ」
白熱していた舌戦は二人の興味が料理に移ったことで呆気なく終結を迎えた。
「食べたら『お迎え』の準備をしましょうね」

＊＊＊

「だいたいな、アヤトは細すぎんだよ。もっと食わんとでかくなれないぞ」
途中、ベニからの「もっと食え」攻撃をかわしながらも何とか食べ終え、3人を伴って宿から外に出た。
「ベニ、いったい私を何歳だと思っているんだ。成長期はとっくに終わっている。これ以上食っても縦には伸びん」
たしかに私はこの中で一番背が低い。ベニと並ぶと肩にも届かない。しかしそれはこいつらと比べればであって、世間一般の中では高い部類に入る。そもそもの基準が違うのだ。
「お前たちが規格外なだけだ。比べるな」
「そうですね。アヤトは今のままで充分かわいらしいので無理して食べることはありませんよ」
「可愛らしいって言うな！」
「アヤトを可愛いと言わずに他に何を可愛いと言う？」
キイロに反論すれば、シアンに真顔で返され思わず呻いてしまう。
これ以上墓穴は掘りたくないので話題を変えることにした。
「・・・やつらが来るとしたら東側からだろうな。」
この町の西から南にかけては崖になっていたので、そこから来ることは先ずない。残るは北か東になるが、大人数で動きやすいのは東の関門の方だろう。

「ええ、おそらくは。」

東の関門まで足を運ぶと先ほど食堂で見かけたような男たちが何人かと、自警団と思しき集団がすでに集まっていた。
篝火が辺りの闇を追い払い、何ともいえない熱気の中で人数分の影が踊る。
集団に近づいていくと、横から男が声をかけてきた。
「なあ、兄ちゃん達もバーミリオンの首狙いか？悪いことは言わねぇからよ、その綺麗な顔がキズものにされないうちに避難しといたらどうだ」
周囲から一斉に笑い声が上がる。
「そうそう、大人しくしといた方がいいぞ。俺たちがバーミリオンをとらえたら、その金で兄ちゃん達を買ってやるからよ」
癇に障る、下卑た笑い声。野卑な視線に晒され徐々に思考が冷えて行く。

「足手まといにはならんよ」

男に視線をやり、軽く口の端を上げてみせる。
「折角この町まで来たんだ。少しぐらいは『遊ばせて』やろうと思ったんだがな。気が変わった。遠慮なく私が奴の首を頂くとしよう」
喉の奥で笑いを噛み殺し、お前たちの出る幕はないよと優しく諭すようにささやく。

一瞬の静寂。
何を言われたのかを、ようやく理解した男が再び口を開きかけた時、大気を引き裂く爆音が轟いた。
地面が揺れ、木端微塵に砕けた関門の破片が飛んでくる。

「来たぞっ！！」

――――赤く輝く広場に影が踊りだした。

彩王主０２　旅人の正体ｓｉｄｅシアン

「来たぞっ！！」

男たちの怒声と火薬のにおい。
外からの襲撃に備えて頑丈に作られているはずの関門はしかし、あまりにも容易く突破され、壊れた門から盗賊たちが次々と侵入してくる。我先にと傭兵団に襲い掛かり、激しい剣のぶつかり合いが始まった。　炎に照らされた広場は踏み荒らされ、土埃が煙のように舞いあがり辺りを霞の中に包み込む。
一瞬で戦場と化した広場。闇夜に、鉄の高く澄んだ音が響きわたる。
俺たちがいる場所は傭兵団を挟んで、防衛線の後方。ここまで来るにはもうしばらく時間がかかるだろう。
自分も早く参戦したいのか、先ほどからベニの落ち着きがない。きらきらと輝くその表情は、まるで玩具をみつけた子供のよう。こいつの脳みそは絶対に筋肉でできているに違いない。

『光陰のバーミリオン』
その通り名が示すのは、襲撃から撤収までの所要時間の短さ。盗賊団としては比較的少人数の集団で、団員は十数人程度しかいないらしい。それは、人が『集まらない』からではなく、『厳選する』からだと聞いたことがある。
少数精鋭を誇り、統率のとれた動きと、頭目バーミリオンの的確な判断が懸賞金の値をつり上げたそうだ。広い範囲で活動するバーミリオンの襲撃情報が入ると、その首を狙って傭兵を稼業とする者たちもまた動く。値が上がれば上がるだけ、その首を望むものも多くなる。しかし、今もなお生き残っている事こそが、やつらの強さを証明している。

「ここで抑えろ！町中まで入れるんじゃねぇぞ！！」
自警団の叫びも空しく、防衛線はじりじりと後退している。
先ほど俺たちに突っかかってきた男も、相手にいい様に翻弄され、焦りを隠しきれていない。あれで傭兵を名乗るとは何ともおこがましいが。――――いいざまだな。

「さて、そろそろ動くか」
　アヤトから放たれた言葉に頷きを返し、周囲に被害が及ばないように結界を張る。普通は外からの攻撃を防ぐ、守のために使われる結界だが、俺の張る結界は内に封じるためのもの。力の及ぶ範囲を限定できるので、こういった街中での戦闘時には役に立つ。
関門から正面広場、そして大通りまでの一帯を結界の範囲内に収め、合図を出す。
「シアン、キイロ、まずは軽く足止めするよ」

アヤトの口が音を紡ぎだす。高く、低く、鮮やかに。女にしては低めだが、男にしては少し高めのアヤトの声。一定の拍子で、旋律をなぞる。　徐々に『力』を帯び始めたそれに、声が重なる。普段とは違った低いキイロの声。アヤトの声と溶け合い、絡まりあって。

二重詠唱。

さらに重ねるように俺も同じ旋律を紡ぐ。

空気が変わり、徐々に練られていく力の大きさを感じ取ってか、周囲にいた黄と青に属する色（しょく）が、騒ぎ始めた。そこまで喚きたてなくても加減ぐらい心得ている。そのための結界だ。十分だろう。

声は混ざりあって。
アヤトのなぞる旋律に溶け込むように。　三人の声が一つの音となる。

『汝、《黄》に連なる者。大地なり。』
地面が大きく揺れ、盗賊団を囲むように急激にひび割れていく。
『汝、《青》に連なる者。水なり。』
引き裂かれた大地から、勢いよく水が溢れだす。
『対する者へ、束の間の拘束を与えん。』
逃げる間などなく。まるでそれは流砂の様に、盗賊団と傭兵の双方を飲み込んでいく。
無事だったのは俺達の近くにいた数人だけ。

「よし、完璧。で、どいつがバーミリオンだと思う？」
殺さぬように、かろうじて首から上だけは埋めないでおいたので、地面には生首が散乱しているように見える。まるで殺戮現場のような有様だが、アヤトはまったく気にしていない。何故だかとても楽しげに、転がっている生首たちを眺めている。
まぁ、アヤトが楽しければ他は別にどうでもいいので俺としては言うことはない。ベニもキイロも同じ考えのようで、手出しせずに見守っている。
「全員を縛って連れていくってのは面倒くさいよな。さて、どうしたものか」
ああでもない、こうでもないとアヤトが一人で呟いていたのをベニが遮った。
「俺が人数を減らしてやろう。」
今夜、やつの出番は無いに等しい。おそらく暇だったのだろう。
「何人かまとめて『縛』をはずしてだな、命を賭けた真剣勝負。もちろん俺に勝てればそのまま逃げてよし。生きるか死ぬかを己の手で決めさせてやろうじゃないか」

事もなげに言い放った。
やはりこいつの脳みそは筋肉で決定だな。
「却下。そんなことしたら誰も残らないだろ。折角生け捕りしたのに」
全くもって正論だ。
緊張感の欠片もない会話が振り出しに戻ったところで、呆然と立ち尽くしていた傭兵が正気を取り戻したかのように一斉に動いた。
大地に呑まれなかったのは俺たちよりも後方にいた5人。うち3人は手にした短剣で残りの2人を捕らえていた。

「動くな」
首に突き付けられている刃が薄く皮膚を切り裂いたようだ。赤い血がみるみるうちに滲みだし、流れるように地面に滴り落ちる。
「動くな。少しでも妙な真似してみろ。殺すぞ」
「その人達は我々の知り合いではありませんが」
キイロが　暗に人質としての価値はないと宣言する。
「どうかな。少しは役に立つかもしれないぜ？ほら、あいつらにお前が誰なのか教えてやれよ」
「ひぃっ！たっ助けてくれ！頼む！見捨てないでくれ。私はこの町の町長だ！」
「……なんで町長がこんなところにいるんだ」
全くもって同感だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5071g/

彩王主

2010年10月28日07時50分発行